



ニッポン ドクター和の 臨終図巻

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫二庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

「50年間、馬車馬のごとく頑張ってきました。入院もしたことがないし、点滴も受けたこともないんですけど。自分の健康、元氣。これがあってこそそのキレイだということをお忘れしないで。私はそれを実践してきたつもりだったんですよ」

「健康で元氣だったんですけど、急に脚が動かなくなると、教えていただいたのがこの結果だったんですね。でも私は皆さんに訴え続けてきました。もっと自分を大切にね。…ごめんなさい、言ってきた人間がこんなことになってしまつて」

「(中略)でも、皆さんの健康、元氣、きれいはずっと私の夢です。…続けてほしいんです。夢は葉。諦めは毒。私、まだまだ負けないわよ！」
今年の3月23日、彼女はゆつ

美容家 佐伯チズ

160

美容家の佐伯チズさんが、6月5日に亡くなりました。享年76。死因は、筋萎縮性側索硬化症(ALS)で



魂も気高く美しい人

くりと言葉を選びながらも、力強く、カメラから目を逸らさずに動画で病を公表。車椅子になつたけれども可能な限り働くことを宣言しました。

私はそのメッセージに感動しました。コロナ禍が明けたら、同じ病に苦しむ人のために活動をしてほしいとお願いに伺おうと思つていました。それが、こんなに早く旅立つてしまつとは

…。

した。病の公表からたった2カ月半ということば、かなり進行の早いタイプだったのでしようか。ALSは、運動ニューロンと言われる神経細胞に障害が起き、手足や呼吸に必要な筋肉が徐々に動かなくなっていく難病です。

10万人中1〜2人が罹患(りかん)し、わが国では今、約1万人の患者さんがいます。1度発症すると、緩やかに進行します。発症から死亡までは2〜5年といわれていますが、私の在宅患者さんの中には、人工呼吸器をつけてもう10年以上、自宅

で元気に過ごしている方もいます。昨年未も、私のクリニックが主催するクリスマス会に来てくださり、一緒に楽しみました。確かに、ALSは徐々に体が動かなくなっていく恐怖と闘わねばならない、恐ろしい病気です。うつ状態になって、「安楽死させてほしい」と仰る方もいます。

「ただ、難病=絶望ではないことを、私は多くのALS患者さんから教わってきました。この連載で以前書いたフランス文学者の篠沢秀夫さん、一昨年亡くなったホーキング博士、日本最大の医療グループ、徳洲会を築き上げた医師の徳田虎雄さんも、2002年に発症後も大きな発言力をお持ちです。

だからこそ佐伯さんにはまだまだ活動してほしい。近い将来、iPS細胞によって治療法が見つかる可能性も期待されています。そう、諦めは毒。外見だけでなく、魂も気高く美しい人でした。